

部では、両国間で ESL 増加促進に大きく関わっている留学エージェントの存在について考察を加える。留学エージェントの働きおよびそのタイプ、さらに聞き取りによる実際のデータをもとに、各個人がステイ先を決定する際の留学エージェントたちの影響を明らかにしていく。論文の最後では、実際にビクトリアに滞在し、その期間に現地の語学学校に通学した経験のある 20 代の日本人男女を対象にしたインタビューの結果を分析し、それまでに述べてきたそれぞれの要因とエージェントの働きが本当にビクトリアに滞在している ESL 生たちのステイ先選択に反映されているのかを検証する。

1980 年代中盤以降の「下町」地域における街並みの変容：

＜働くまち＞から＜住むまち＞へ

牧野 彩

本研究では、東京都の江東地域、なかでも江東区の白河地区を事例に、1980 年代中盤以降の「下町」地域における街並みの変化を明らかにし、街並みの変化が街に与えたインパクトについて考察した。

その結果、白河地区に多く立地していた専用工場や倉庫・運輸関係施設は民間の大手ディベロッパーが供給する大規模マンションへと変化していった。これらの大規模マンションは、その間取り、専有面積、分譲価格などから、ファミリー層をターゲットとしていることが明らかになった。そこで白河地区における住民構成を分析したところ、最近 10 年間に於いて住民構成に大きな変化が確認された。白河地区では近年、ブルーカラー層からホワイトカラー層への職業階層の入れ替えがみられた。白河地区にみられるホワイトカラー層の特徴は、年齢が 20～44 歳の核家族で、就業者の多くはサービス業などの第三次産業に従事し

ていた。

住民構成の変化によって、地域商業やサービス機能にも変化がみられるようになった。住商併用施設や住居併用工場の跡に建てられた複合ビルの 1 階には、以前この地区にはみられなかったような業種の店舗が入居しており、これらは先述したホワイトカラー層をターゲットにしたものと考えられた。この点に、白河地区ではジェントリフィケーションの兆候が認められる。

以上のように、「下町」地域の街並みが変化した要因には、産業構造の転換、地域の形成史、交通利便性の向上が指摘され、「生産」の役割を持つ＜働くまち＞であった「下町」地域は、最近 10 年間で「消費」の役割を持つ＜住むまち＞へと大きく変貌したのである。

しかし、20 年・30 年先の「下町」地域の街並みは現在と同じ様相を呈してはいないだろう。建物の老朽化や高齢化、ニーズの変化にあわせた大型小売店の撤退、定住意識、経済の動向など、今後の「下町」地域の街並みを変化させる可能性を持つ事由は多く存在する。

変化する雪国の生活：

屋根雪処理法の発展が生み出す新たな事故
松田 明子

時代とともに、雪国では、進歩する技術を駆使してさまざまな除雪法が開発されてきた。特に屋根の雪下ろしの苦勞から解放されようと、雪国の屋根は、自然落下方式や、融雪方式などさまざまな屋根雪処理法が考案され、普及している。雪国の住居の屋根や家の周りは、雪のない、昔と異なる空間が出来ている。

昔に比べ雪処理は楽になったが、除雪中に起きる事故はなくなり、昔は無かったタイプの事故が増えている。これは、雪国の一見便利になった住宅構造が原因となっているのではないか。

豪雪地帯として知られる新潟県南魚沼地域を事例に、家屋の構造と、雪による事故との関連、また雪国に暮らす人々の雪に対する意識の変化について明らかにするという目的を達成するために、①家屋の屋根の種類と分布の調査、②南魚沼地域における、近年の雪による人身事故の種類と原因についての分析、③聞き取り調査を行った。

その結果、次のようなことがわかった。

- 屋根の分布は、自然落下方式と人力雪下ろし方式の屋根が8割弱を占め、その他の融雪方式はあまり普及していない。それぞれの方式に、生活への異なった制約があり、それを考慮して、雪国の人は自分の家の屋根の方式を選択している。
- 屋根雪処理中に屋根から転落して負傷する事故や、屋根からの落雪による事故が目立ち、近年の自然落下方式の普及や、住居の周りの消雪システムの発展による、負の影響が考えられる。
- 冬でも雪を意識せず生活できるようになり、生活が楽になった面もあるが、雪に対して受動的な生活から、雪に対処する生活となり、生活の中で除雪にかかる時間や費用は大幅に増大した。雪国に暮らす人々は、不便であるが面白みを持つ、雪国の生活の複雑さを理解している。

江戸期における「遊廓」の社会空間： 歌舞伎における「遊廓」の空間表象を通して 村上 友望

遊廓は公娼制度によって誕生し、一定の区域内に遊女を集娼した空間で、昭和半ばまで存続した空間であった。

本論文では、遊廓の対象を江戸時代の江戸の吉原遊廓に焦点をあて、都市における遊廓の社会空間というものを考察する。

江戸時代初期、江戸という新たな土地に都市を形成する上で、遊廓が設置されたが、のちに江戸の

周縁地域へと移動させられ、この周縁地域と遊廓の閉鎖的性格が、遊廓をより非日常的空間へと導いた。こうした背景や特色、また、遊廓内の組織などを踏まえて、遊廓がどのような社会空間であったのかを考察する。そして、一考察方法として「歌舞伎」というメディアを使用する。そもそも、「遊廓」と「歌舞伎」は江戸時代、幕府の封建制度によって世間的に「悪所」とみなされていたという共通した性格があることや、また現在でも当時の文化を伝承し、再現するという特色を利用する。

また、考察する上で問題になってくるのが「ジェンダー」である。遊廓は、封建社会において、男性によって男性のために作られた空間であり、また遊廓内も女性の空間のように見えて、当時の家父長制の影響を受け、男性によって支配されている空間であったといえる。その遊廓を歌舞伎演目として描く際に、劇作家も男性であるという、遊廓は常に男性支配によって存在していた。

また、遊廓は、遊興費が高く、庶民には立ち入ることが出来ない空間であった。そこで、男性庶民が利用する岡場所と遊廓を比較したり、当時の社会を反映した歌舞伎演目を通して、庶民との関係を考察する。

江戸期の遊廓は、当時の社会的背景や都市の中で周縁という場所性がより閉鎖的な空間であったといえる。しかし、閉鎖的でありながらも存続し続けたのは、都市という中で「遊廓」が問題視されることがなかったことである。本論文では、その背景などを通して遊廓の社会空間を考察する。